

# 剣道授業で「攻防の展開」は学んでいるのか —事例の批判による検討—

牧野 祥子 森 勇示  
愛知教育大学大学院 愛知教育大学

## Can students learn “tactics in a serious match” in Kendo class. — A critical examination of cases —

Shoko MAKINO Yuji MORI  
Aichi University of Education

キーワード：武道，剣道授業，攻防の展開

Key Words：Budo, Kendo class, tactics in a serious match

### 1. 問題と目的

学校現場では、武道の授業を難しいと感じている現職教員がしばしば見受けられる。その理由として、「本来の学習事項以外のことに想定外の時間がとられ、指導に予想以上に時間を要した」「剣道の基本動作，所作，伝統的な考え方，基本打突のポイントなど，特に技能に関して教えなければならないことが多かった」「指導内容を明確にし，ポイントを絞ることができなかった」などが挙げられている<sup>1)</sup>。

現行中学校学習指導要領の剣道の内容は，第1学年及び第2学年では「相手の動きに応じた基本動作から，基本となる技を用いて，打ったり受けたりするなどの攻防を展開すること」とあり，第3学年では「相手の動きの変化に応じた基本動作から，基本となる技や得意技を用いて，相手の構えを崩し，しかけたり応じたりするなどの攻防を展開すること」と示されている<sup>2)</sup>。これらのことから，中学校の剣道の授業では「攻防の展開」が中心的な指導内容になると考えられる。また，中学校学習指導要領解説（以下解説）では武道を「勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動」と示していることから<sup>3)</sup>，勝敗を競い合うことを武道の特性として捉えていると言える

だろう。

解説の「技能」では，「攻防の展開」を行う場として，第1，2学年は「自由練習やごく簡単な試合」<sup>4)</sup>，第3学年は「自由練習や簡単な試合」<sup>5)</sup>を挙げている。これらのことから，「攻防の展開」は相手と対峙し，互いに攻防し合うという条件で行われるものと解釈される。さらに剣道の試合について高野は「技量にあまり差のない二人が対峙して，すでに習得した技術を尽くして戦い，勝敗を争うこと」と述べている<sup>6)</sup>。富木は武道の勝負について，生死にかかわらず，競技の場は勝負の場であり，心の動揺する場であるとしている<sup>7)</sup>。つまり，試合とは，勝負をする場であり，そこには心の動きが伴うほどの真剣さが必要であると考えられる。

これらのことから，「攻防の展開」とは，真剣勝負の試合で攻防し合うことであると筆者は考える。

しかし，剣道は基本動作の習得に多くの時間が割かれることが予想される。なぜなら，剣道の基本動作は，構え方，竹刀の振り方，足さばきなど剣道特有の動き方として多岐にわたるからである。そのため，授業の大半がその習得に終始してしまうと，試合をする時間が足りなくなる。基本動作の習得に終始し，試合経験が不足することで，

「攻防の展開」に迫ることができなければ、剣道の中心的な学習をさせることができない。これが、本稿の問題とするところである。この問題に対し、「攻防の展開」が学べているのかどうかをいくつかの事例から検討する。これをもとに、剣道の単元計画について、基本動作・対人的技能・試合の在り方を提言する。以上を本研究の目的とする。

## 2. 方法

「攻防の展開」についての学びを損ねている実践事例として、複数の剣道授業の指導案や実践例、論考をもとに、「攻防の展開」に迫ることができないと考えられる例を指摘する。また、中学校剣道授業の一つの実践事例を対象に、基本動作と対人的技能が試合の中に出現している状況に着目し、これらが学ばれている可能性を検討する。

## 3. 「攻防の展開」に迫ることができないと考えられる実践例

### 3-1. 基本動作の習得に重点をおいた実践

時間	主な学習活動／評価基準
1	・学習のねらいと進め方・剣道の動画を見せイメージを持たせる ・礼法、所作
2	・防具の着脱（面・胴）
3	・基本動作（構え、足さばき）・手刀・竹刀操作・新聞紙切り
4	・基本動作（足さばき、体さばき）・竹刀操作・手の内練習・裏振り（正面、左右、跳躍裏振り）
5	・基本打ち（打突と踏み込みの一致した打ち、面、小手、胴）
6	・基本動作（面、小手、胴の打ち込み） 【本時1／3】
8	・防具の着脱（面・小手）・面、小手、胴の打ち込み稽古
9	・まとめ

図1「基本動作習得のみの単元例」

図1は中学校1年生剣道の単元計画例である<sup>8)</sup>。

9時間単元のうち、試合をすることなく単元が終始している。本単元の技能の目標は「基本動作を理解し、正しく行うことができる」「基本的な打ち方を理解し、面や小手や胴を打つことができる」「相手の動きに応じた基本動作から、打ったり受けたりすることができる」であり、基本動作を習得すること自体が目標となっている。

他の事例<sup>9-12)</sup>も単元時間の約8割が基本動作や各技の動き方を身につける練習であり、単元の中で試合が行われないうち、試合が行われていても2～3時間程度しか扱われておらず、この時間数では、「攻防の展開」に迫った学習をするのには不十分と考えられる。「攻防の展開」に迫った学習をさせるには、身につけた動作や技が反射的に試合の中で出現する時間数が必要であると考えられる。

### 3-2. 多くの技を教師に教え込まれる実践

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標	学習目標
1 剣道の特性を知る	2 ねらい、目標を知る	3 学習の仕方を覚える	4 基礎動作と技術の習得	5 用具の扱い方、使用上の注意を理解する	6 剣道用具をつけ、打突部と打突部位の確認	7 基礎技の習得	8 基礎技の習得	9 基礎技の習得	10 基礎技の習得	11 基礎技の習得	12 基礎技の習得	13 基礎技の習得
1 剣道の特性を知る	2 ねらい、目標を知る	3 学習の仕方を覚える	4 基礎動作と技術の習得	5 用具の扱い方、使用上の注意を理解する	6 剣道用具をつけ、打突部と打突部位の確認	7 基礎技の習得	8 基礎技の習得	9 基礎技の習得	10 基礎技の習得	11 基礎技の習得	12 基礎技の習得	13 基礎技の習得
1 剣道の特性を知る	2 ねらい、目標を知る	3 学習の仕方を覚える	4 基礎動作と技術の習得	5 用具の扱い方、使用上の注意を理解する	6 剣道用具をつけ、打突部と打突部位の確認	7 基礎技の習得	8 基礎技の習得	9 基礎技の習得	10 基礎技の習得	11 基礎技の習得	12 基礎技の習得	13 基礎技の習得

図2「技を教え込む単元例」

図2は中学校3年生の剣道の授業の単元計画例である<sup>13)</sup>。

この実践では、生徒に教える技が面、小手、胴だけではなく「小手→面」「面に対して抜き胴」「面に対して出ばな小手・出ばな面」「小手に対して抜き面」「小手すり上げ面」「鑢ぜり合いからの技」「体当たりからの技」「連続技」「面に対しての応じ技」「小手に対しての応じ技」と多数に及ぶ。

他の事例<sup>14-19)</sup>も同様に、多数の技を子どもに教え込んでから試合をする実践である。

多数の技を教え込む実践が行われる理由として、教師の持つ指導観に、技を身につけ、多数の技を知っていないと試合ができないという概念があることや、試合は技の選択による攻防という考えがあることが推察される。

筆者は、教え込まれた多数の技を試合で有効に活用できるかという点について疑問に感じる。岩田らは、「技（打突）の基本練習と試合との間に大きな飛躍（ギャップ）がある」と基本動作と試合との繋がりを問題視している<sup>20)</sup>。教師に一方的に教えられた技は、実際の試合になると、その技をどのような場面で、どのタイミングで使えばいいのかが分からず、技を有効に使うことができないことが予想される。

また、教師が技を教え込む授業を構想する理由として、授業は子どもに技能を教え込むものという指導観が示唆される。鈴木は、体育学習を、「獲得」と捉え、指導を「伝達」と捉えることを困難視し、学習を「運動の意味生成、学習内容の生成」と捉え、指導を「かかわり合いを結ぶこと」と捉える必要性を述べている<sup>21)</sup>。この主張をもとに考えると、剣道の授業で多数の技を子どもに教え込んでから試合をさせることは、教師が体育学習を技能・知識の「獲得」と捉え、指導をその「伝達」と捉えていることが起因していると考えられる。これを「運動の意味の生成、学習内容の生成」と捉え直すことで、技や動きは教師が教えたり伝達したりするものではなく、子どもたちが学習の中で生成し、自得していくもので、そのためには試合や練習で他者とかかわる機会を多く設けることが必要であると考えられることができる。

多様な技や動きは試合の中で発揮されるものであり、技の必要性は試合の中で感じるものである。試合という文脈の中で、子ども自身が、自らの特性に合った技を、適切な場面で発揮し、自得して

いくことができると筆者は考える。そのために必要なのは、試合経験を多く積ませることである。

### 3-3. 「攻防展開づくり」で技を創作する実践

図3は本多が提唱する中学校1年生の剣道授業の単元計画である<sup>22)</sup>。

この実践では、単元前半では、攻撃パターンを教え相互評価をさせ、単元後半では、協働学習によるオリジナルの「攻防展開づくり」をさせ、試合をせずに単元を終えている。

この実践について本多は、

対人的攻防を中核とする剣道だからこそ、その醍醐味を十分に味わわせるため「こうしたら（攻撃の機会づくり）、こうなって（相手の反応）、こう打って、一本！」といった攻撃の筋道を理解して、それを遂行するための明確な技術的課題への認識を持たせ、試行と思考の往還を図りながら授業を展開していくことを大事にしています。

と述べ<sup>23)</sup>、剣道の「対人性」という特性を学習の中核にし、技術的課題を「攻防の筋道を理解すること」としている。

このように、攻防の展開を学習の中心に位置づけて、「攻防展開づくり」をすることは、本多が述べる「したい」「させたくない」という対人的技能の攻防や戦術的・技術的に「相手をどのように打つか」ということ<sup>24)</sup>を子どもたちは分かりやすく捉えることができるかもしれない。しかし、それは試合の中で行われている攻防の展開と一致

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
	本時の学習内容の確認、新習技の安全確認、W-up(ウォームアップ)エクササイズ									
10	オリエンテーション ・内容・展開について ・武運(剣道)の特性	攻撃パターン①(ある部位を打つと見せかけて、相手に誘導させ、別の部位を打つ攻撃パターン)の理解 「チャンスをつかって胴と面一本!」	スキル W-up	スキル W-up	攻撃パターン②(ある部位を打撃して、相手が防衛した結果生じた別の部位を打つ攻撃パターン)の理解	スキル W-up	スキル W-up	スキル W-up	スキル W-up	10
20			攻撃パターン①の理解に基づいた基本動作 面、胴打ちと打たせ方	グループ学習 攻撃パターン②の理解に基づいた基本動作 小手一打打ちと打たせ方	「パターン①とは異なる方法でチャンスをつかって胴と面一本!」	攻撃パターン②の理解に基づいた基本動作 小手一打打ちと打たせ方	攻撃パターン②の理解に基づいた基本動作 小手一打打ちと打たせ方	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり	20
30			攻撃パターン①の理解に基づいた基本動作 面、胴打ちと打たせ方	基本動作、攻撃パターン①の出来栄の相互評価 面打ち 胴打ち 面一打打ち 小手一打打ち	攻撃パターン②の理解に基づいた基本動作 小手一打打ちと打たせ方	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり (攻撃パターン②の活用、基本動作の確認含む)	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり	オリジナルの攻防展開づくりの仕上げ、相互評価	30
40			攻撃パターン①による面一打打ちと打たせ方 小手一打打ちと打たせ方	グループ学習(出来栄の相互評価に向けた取り組み)	伝統的な考え方・行動の仕方の理解 礼の習得・言葉の理解 立礼の実践	協働学習によるオリジナルの攻防展開づくり (攻撃パターン②の活用、基本動作の確認含む)	伝統的な考え方・行動の仕方の理解と行動の実践	オリジナルの攻防展開づくり	オリジナルの攻防展開づくりの仕上げ、相互評価	40
50			攻撃パターン①による面一打打ちと打たせ方 小手一打打ちと打たせ方	立礼を取り入れて行う基本動作、攻撃パターン①の仕上げ					学習のまとめ	50

図3 「攻防展開づくりの単元例」

1	2	3	4	5	6	7～12
①防具装着 ②構え方、 足さばき ③面付け ④その場面打ち	①防具着装 面付け ②面打ち ③胴打ち ④小手打ち ⑤攻防限定試合Ⅰ	①防具着装 面付け ②面打ち ③面打ち判定練習 ④6人組面打ち	①防具着装 面付け ②6人組面打ち ③6人組引き面 ④引き面判定練習 ⑤6人組み面 当たり引き面	①防具着装 面付け ②6人組小手体 当たり引き面 ③6人組小手体 当たり引き胴 ④攻防限定試合Ⅱ	①防具着装 面付け ②課題練習 ③攻防限定試合Ⅱ ④試合 ⑤課題確認 ⑥試合	①防具着装 面付け ②攻防限定試合Ⅱ ③試合 ④課題確認 ⑤試合

図4 「A 中学校の剣道単元計画」

したものと言えるのだろうか。実際の試合では、相手が何をしてくるかわからないということが前提にある。相手が攻めてくるのか、守るのか、何を打ってくるのか、それらがわからないところで、自分が打ったり、守ったりする。このように考えると「攻防展開づくり」のように、相手と約束をして動くことと試合で行われる攻防の展開は異なるものと言えるのではないだろうか。

「攻防展開づくり」は約束をして動くことが前提にあることから、基本動作の習得と相違ないと考えられる。むしろ、「攻防展開づくり」をし、相互に見せ合って評価するという活動は表現活動に傾斜しているとも捉えられる。

これらのことから筆者は、「攻防の展開」は、相手が何をしてくるかわからないということが前提となった状況でしか味わえないものであると考える。

#### 4. A 中学校の実践の批判的検討

前項では、3つの事例に対して①基本動作の習得に学習の重点が置かれている②多くの技を教師に教え込まれる③約束した対人動作の発表、という「攻防の展開」に迫ることができない例を指摘した。これらの事例から、剣道の授業には、試合の状況の中で行われる「攻防の展開」の学習よりも、技や動きの習得が学習の中心になってしまう考え方があると推察される。このような実践は、技や動きがいかに関習得されたかが重要視され、「勝敗を競い合う楽しさや喜び」を味わわせることや試合の状況の中で発揮される「攻防の展開」を学ばせることが困難となったり、その学習に至らなかったりする可能性があると考えられる。

そこで、筆者らは「攻防の展開」に迫ることを

ねらい、試合中心の剣道の授業を計画した。その実践の中に出現した動きや技に注目し、「攻防の展開」としての対人的技能が自得される可能性について検討する。そして、「攻防の展開」に迫るための基本動作・対人的技能・試合の在り方を考察する。

##### 4-1. 実践対象者・授業者

対象者 A 中学校2年生

授業者 第1時:筆者、第2時以降:A 教諭(教職年数12年)

##### 4-2. 単元計画

図4のように12時間扱いの剣道の単元を計画した。第1～6時では基本動作の習得をねらい、第7時以降は試合を中心とする授業になっている。このように単元の半分以上で試合を実施した実践となった。

##### 4-3. 試合で出現した問題として捉えられる動きについて

剣道における「攻防の展開」をするためには、基本動作を身につける必要がある。恵土は、初心者は感情的な攻撃動作となることを問題とし、その場での打突動作とならないように指導することと述べている<sup>25)</sup>。そこで、剣道らしさを損ねている動きを取り上げ、「攻防の展開」に迫るために必要な基本動作について検討する。

##### 【近い間合での打ち】



図 5-1

図 5-2

図 5-3

図 5-4

図5 「近い間合いでの打ち」

図5はAが面と胴を打ち、Bがそれを防いでいる様子である。図5-1でAは、両肘を曲げて剣先を天井の方に高く上げ、左足のかかとが床についた状態で立っている。Bは剣先を相手の頭くらの高さで構えている。図5-2では、Aは1歩前に出ながら右足に体重をかけて、Bの面をねらって竹刀を振り降ろしている。それに対してBは、肘を曲げて、手元を低くし、相手の打ちを竹刀で防いでいる。図5-3で、再びAは剣先を高くして竹刀を振りかぶっている。Bは右に竹刀を傾けて、左手と右手を高い位置に上げている。図5-4でAはBの胴をねらって打とうとしているが、Bは手元を低く下げて、Aの打ちを防いでいる。

Aは図5-2と図5-4の2本打っているが、2本とも腕を伸ばすと打突部位に触れてしまうほどの近い間合から打っている。また、Aはこの2本の技を打つときに移動したのは図5-2に見られる1歩のみであり、打ちも弱い。

このことから、Aは、相手との適切な間合（一足一刀の間合）を理解できていないため、近い間合から打っていると推察される。また、間合が近くなってしまっていることで、踏み込みがなく、気剣体が一致しない弱い打ちであると考えられる。

#### 【残心のない打ち】



図 6-1 図 6-2 図 6-3

図6 「残心のない打ち」

図6はAの面が決まった様子である。図6-1でAは剣先を上げながら前進し、図6-2で、足の位置は動かさずに、体重を前にかけてBの面を打っている。打った後、Aは図6-3のように肘を下げて剣先を上に向けて、左膝を曲げてその場で止まっている。このような動きから、Aは、打った後、残心をとることができていないと考えられる。

#### 【手元だけの打ち】

図7はAの面が決まった様子で、Bが肘を曲げて竹刀を傾けて動きが止まっているところをA



図 7-1 図 7-2 図 7-3 図 7-4

図7 「手元だけの打ち」

は面を打ち、一本と判定された。この打ちでは、図7-1～3のように、Aは1歩も動いておらず、手元だけの面打ちとなっている。図7-4でAは打った後、体の向きを横に向けて、相手から目をそらし、後ろにさがろうとしている。この様子から、Aの面打ちは、気剣体が一致しない弱い打ちで、残心のないものとなっていると言えるだろう。

#### 4-3-1. 基本動作における課題

A中学校の試合では①近い間合②気剣体が一致しない弱い打ち③残心がない、という問題として捉えられる動きが出現した。このような動きが現れたのは、基本動作習得段階の学習過程に原因があったと推察する。

まず、基本動作習得段階では、打ち方の説明をするときに竹刀の振り方と踏み込みをすることを教えたのみで、「どれくらいの距離から打つのか」「打った後はどのように動くのか」を子どもに伝えることなく練習を進めていた。気剣体を一致させることについては、「気を声、剣を打ち、体を踏み込み」と定義して指導していたが、どのような打ちを気剣体の一致した打ちと言えるのか、どれくらいの強さで打てばよいのかを子どもに十分理解させ、習得させることができていなかった。

これらの原因の一つとして、教師が少ない時間の中でたくさんの技を教え込もうとしたことが挙げられる。子どもたちが一つ一つの動きを理解し、習得する間もなく、次から次へと課題が与えられていた。そのため、動きの習得が中途半端になってしまい、①近い間合②気剣体が一致しない弱い打ち③残心がないという動きが現れたと考える。

このことから、基本動作習得段階では、①一足一刀の間合②気剣体の一致した強い打ち③残心を基本として捉え、その重要性を子どもに理解させ、習得させる必要があると考える。そのためには、た

くさんの技を教えようとするのではなく、教える技を「面打ち」に絞って、①一足一刀の間合②気剣体の一致した強い打ち③残心の基本を子どもが習得できるよう、練習機会を確保する必要があると考える。

#### 4-4. 試合で子どもが自得した技について

A 中学校の実践では、試合中心の授業を計画し、試合経験を多く積ませたところ、教師が技として教えなくても試合の中で子どもが技を自得している様子が見られた。

##### 【払い小手】



図 8-1 図 8-2 図 8-3 図 8-4

図 8 「払い小手」

図 8 は、A が小手を打つ様子である。図 8-1 のように A は中段に構えたところから、図 8-2 で自分の竹刀を相手の竹刀の裏（左側）に回し、竹刀を払っている。図 8-3 のように B が手元を上げて動きを止めたところを、図 8-4 で 1 歩踏み出しながら小手を打っている。この図 8 の A の打ちは、相手の竹刀を払って隙をつくり、小手を打つ、払い小手であると捉えられる。

##### 【フェイント胴】



図 9-1 図 9-2 図 9-3 図 9-4

図 9 「フェイント胴」

図 9 は A が胴を打つ様子である。図 9-1 と図 9-2 で、A は中段の構えから、1 歩前に出ながら振りかぶるように手元を上げ、B は A の動きに合わせるようにして、手元を上げている。図 9-3 と図 9-4 で A は B が手元を上げた瞬間に竹刀を下に振り下ろし、胴を打っている。

一連の動きから、図 9-2 で見られる A の手元を上げる動きは、B に手元を上げさせるためのフェイントであると考えられる。A が手元を大きく上げたことで、B は面を防ぐようにして、手

元を上げ、そこで隙となった胴を A に打たれている。

以上の様子から、A の技はフェイント胴であると考えられる。

##### 【面胴】



図 10-1 図 10-2 図 10-3 図 10-4

図 10 「面胴」

図 10 は試合の一場面であり、A が面から胴を打つ様子である。図 10-1 と図 10-2 で、A と B は中段の構えで向かい合い、A は振りかぶりながら 1 歩前進する。図 10-3 で A は面を打つが、B は手元を上げて竹刀で A の面を防ぐ。図 10-4 で、A は手元が上がっている状態にある B の胴を打った。

この様子から、A は面を打つことによって、B に手元を上げさせて胴に隙をつくり、胴を打っていると捉えることができる。この技は、面胴の二段技であると考えられる。

##### 【かつぎ面】



図 11-1 図 11-2 図 11-3 図 11-4

図 11 「かつぎ面」

図 11 は A が面を打つ様子である。図 11-1 で、ともに中段に構えた状態から、図 11-2 で A は竹刀を振りかぶり、B はそれに合わせるようにして手元を上げている。図 11-3 で A は 1 歩前にでながら左肩に竹刀をかつぎ、B は竹刀を右斜め下に降ろして首を傾けている。図 11-4 で A はかついだ竹刀を振り下ろし、B の面を打っている。

この様子から A は前に出ながら、一旦竹刀を左肩にかつぐことで相手が面を防ごうとすることを、タイミングをずらして面を打っていることがわかる。このような A の動きから、この技はかつぎ面であると考えられる。

#### 4-4-1. 対人的技能の自得の可能性

試合の中で出現した技として「払い小手」「フェ

イント胴」「面胴」「かつぎ面」の4つを例示した。この4つの技は「しかけ技」に該当する対人的技能である。これらの技は教師が教えたのではないことから、試合の中で子どもが自発的に発揮したものであると考えられる。このことから、試合経験を多く積ませることで、自らの特性や試合の状況に応じた対人的技能を自得していくことができる」と筆者は考える。

剣道には、「防禦は攻撃のために、攻撃はおのずから防禦となる」「懸かる中にも待があり、待つ中にも懸かりがある」という考え方がある<sup>26)</sup>。このことから、攻撃と防禦は表裏一体で、ほぼ同時進行で繰り返されるものであると解釈できる。「しかけ技」が成立するのは、打たれる方が相手の技を防ごうとする動きをするからである。剣道の試合では、常に相互の動きに攻防が混在し、それによって技が成立する。これこそが「攻防の展開」の学習となるのではないかと考える。

つまり、試合を多く経験することは、対人的技能を身につけるためにも、「攻防の展開」の学習をするためにも、必要不可欠であると言える。

## 5. まとめ

中学校学習指導要領における剣道の内容では「攻防の展開」が中心的な学習内容であると解釈される。そして、「攻防の展開」とは、真剣勝負の試合で攻防し合うことであると筆者は考える。しかし、批判的な検討した事例から、実際の授業では、基本動作の習得で単元が終始してしまったり、多くの技を教師が教え、試合をする機会を減少させていたり、約束した対人動作の発表としたりする授業が見受けられた。剣道の学習内容としての「攻防の展開」は、相手が何をしてくるかわからないという状況で、攻防する試合から学習し、さらに試合経験を豊富にさせることが必要であると考えられる。

A中学校の実践では、単元時間の半分以上に試合が設定された。この実践を検討した結果、問題として捉えられる動きとして①近い間合②気剣体の一致していない弱い打ち③残心がない動きが出現した。これらの動きは基本動作習得段階での学習過程に原因があったと推察される。

そこで、基本動作習得段階では①一足一刀の間合②気剣体の一致した強い打ち③残心を基本として捉え、教える技を「面打ち」に絞ることで、練習機会を十分確保し、基本動作の定着を図ることができる」と考える。

また、A中学校の実践では、試合経験を豊富に積ませたことで、「払い小手」「フェイント胴」「面胴」「かつぎ面」のしかけ技が試合で出現した。試合を通して、子どもが対人的技能を自得していった可能性が考えられる。このように「しかけ技」が成立する背景には、相手との攻防のやりとりがあり、子どもは試合をする中で、「攻防の展開」の学習をしていると考える。

以上のことから、基本動作の習得段階で①一足一刀の間合②気剣体の一致した強い打ち③残心を基本として身につけさせ、試合を多く経験させることで対人的技能を自得していき、「攻防の展開」の学習をすることができる」と筆者は考える。

## 6. 引用・参考文献

- 1) 山内明人：学習指導要領改訂ポイントを踏まえた剣道の授業の工夫－単元構想図と学習計画表の作成を通して－，青森県総合教育センター研究紀要，2013
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領，p 87-91，東山書房，2011
- 3) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編，p.99，東山書房，2008
- 4) 上掲書3) p.103
- 5) 上掲書3) p.112
- 6) 高野佐三郎：剣道，中村民雄訳，島津書房，p.123，2013
- 7) 富木謙治：武道の近代化による新しい体育文化の創造を，体育科教育第13巻第2号，1965，pp.38-40
- 8) 岩手県総合教育センター：二戸市立金田一中学校，保健体育科学習指導案，2012
- 9) スポーツ庁政策課学校体育室：氷見市立十三中学校，平成26年度武道等指導推進事業実践事例報告集，2016
- 10) 文部科学省スポーツ・青少年局：大町町立大町中学校，平成24年度学校体育振興事業研

究報告集, 2013

- 11) 広島県教育委員会：廿日市市立四季が丘中学校  
校広島県中学校教育研究会保健体育部会保健  
体育科学習指導案, 2015
- 12) 全日本剣道連盟：全日本剣道連盟編剣道授業  
の展開, p.18, 2013
- 13) 上掲書 12) p.37
- 14) 文部科学省スポーツ・青少年局：神崎市立背  
振中学校, 平成 25 年度学校体育振興事業研  
究報告集, 2014
- 15) 長野県教育委員会事務局スポーツ課：平成  
23 年度文部科学省委託事業－中学校武道必  
修化に向けた地域連携指導実践校事業－剣道  
指導の手引き, 2012
- 16) さいたま市教育研究所：さいたま市立大谷場  
中学校, 第 2 学年 4・5・6 組保健体育科学習  
指導案, 2015
- 17) 糸岡夕里・日野克博・中岡祐紀ら：中学校に  
おける「剣道」の授業実践－生徒の剣道に対  
するイメージに着目して－, 愛媛大学教育学  
部紀要第 58 巻, pp.137-144, 2011
- 18) 鹿児島県総合教育センター：保健体育科学習  
指導案, 2011
- 19) 全日本剣道連盟：安全で効果的な剣道授業の  
展開, pp.32-46, 2014
- 20) 岩田靖・中村恭之・三井清喜：「対人技能の  
面白さ」をクローズアップする, 体育科教育  
第 57 巻第 9 号, pp.62-67, 2009
- 21) 鈴木直樹：関係論に立つ小学校体育の授業づ  
くり－2008 年学習指導要領の改訂を契機に  
して－, 大学教育出版, p.8, 2008
- 22) 本多壮太郎：「伝統と文化」は「技術」とセッ  
トで学ぼう!, 体育科教育第 65 巻 10 号,  
2017, pp.28-31
- 23) 上掲書 22), p.29
- 24) 本多壮太郎：いま, 武道の授業で教え, 学ば  
せるべきこと, 体育科教育第 64 巻第 3 号,  
2016, pp.20-23
- 25) 恵土孝吉：剣道－指導法をめぐって, 体育科  
教育第 35 巻第 7 号, 1987, p.24
- 26) 高野佐三郎：剣道, 中村民雄訳, 島津書房,  
2013, p.179